

図書館だより

開館時間（共通）9：00～17：30
 問 中央図書館 ☎ 0558-76-5566
 問 葦山図書館 ☎ 055-949-8605
 URL http://www.izunokuni.library-town.com/

ピックアップ

一般



宇喜多の楽土
木下昌輝／著
文芸春秋

著者のデビュー作「宇喜多の捨て嫁」の続編。父直家のような謀略の才はなく、ただ己の信念に従った秀家。関ヶ原の敗戦後、秀家のとった行動と決断とは。【中央】

一般



三千円の使い方
原田ひ香／著
中央公論新社

「人は3,000円の使い方で人生が決まるよ」24歳社会人と29歳子育て中の姉妹。55歳の母と73歳の祖母。御厨家の人々が、不安やピンチを前向きに乗り越える、家族小説。【葦山】

7月の図書館カレンダー

日	月	火	水	木	金	土
1	②	3	④	5	6	7
8	⑨	10	⑪	12	13	⑫
15	⑬	17	⑮	⑮	20	21
22	⑮	24	⑮	26	⑮	⑮
29	⑮	31				

○中央休館日 □葦山休館日
 ◇両館休館日 ☆おはなし会

☆7月のおはなし会

中央図書館 14日(土) 11：00～
 葦山図書館 14日(土) 14：00～
 28日(土) 14：00～
 大仁くぬぎ会館こども広場
 19日(木) 11：00～

新着本コーナーから

- 一般 食堂メッシタ 山口恵以子／著【中央】
- 一般 あの人とあの本の話 瀧井朝世／著【葦山】
- 一般 キネマトグラフィカ 古内一絵／著【葦山】
- 一般 沈黙の駿河湾 東海地震第40年 静岡新聞社／編【中央】
- 児童 水色の不思議 齊藤洋／著【中央】
- 児童 あべ弘士どうぶつクイズ教室 あべ弘士／さく【葦山】

お知らせ

葦山図書館 夏のおたのしみ会

とき／7月28日(土) 14：00～15：00
 ところ／葦山図書館 幼児図書室
 対象／幼児～小学生とその保護者
 内容／大型絵本、紙芝居、エプロンシアター、手遊びなど
 協力／かみふうせん

子どもたちの夏休み工作教室

ペットボトルで風鈴を作ろう！

◆とき／8月2日(木) 10：00～11：30
 ◆ところ／中央図書館2階 視聴覚室
 ◆対象／小学1～6年生 20人(先着順)
 (1～2年生は保護者同伴)
 ◆持ち物／油性カラーマジック(ある人のみ)
 ◆申し込み方法／7月7日(土)以降窓口または電話で申し込み
 問 中央図書館 ☎ 0558-76-5566

伝統おもちゃ パタパタを作ろう！

■とき／8月9日(木) 10：00～11：30
 ■ところ／葦山図書館 幼児図書室
 ■対象／小学1～4年生 10人(先着順)
 (1～2年生は保護者同伴)
 ■持ち物／はさみ、スティックのり
 ■申し込み方法／7月7日(土)以降窓口または電話で申し込み
 問 葦山図書館 ☎ 055-949-8605

文化財通信

その157

江川坦庵公、父としての横顔

問 文化財課
 ☎ 055-948-1428

葦山反射炉の建設や品川台場の築造をはじめ、数々の功績を残した江川坦庵公。まさに、幕末の日本における、屈指のプロジェクリーダーです。もちろん、葦山代官として管轄地の民政をこなしながらのことですから、その忙しさは想像を絶するものだったことでしょう。

江戸と葦山を行き来しつつ、数多くの仕事を並行して進めていく中で、家族と過ごす時間も当然限られていたはずです。もとより、江戸時代の武家ですから、現代を生きる私たちとは、家族に関する考え方も違っていたでしょう。何より、旗本として將軍に仕えることが第一であり、そのうえで日本をどのように守っていくかということに生命を賭したのが、坦庵公だったのです。

しかし、だからといって家族のことを顧みなかったわけではありません。むしろ子どもたちの教育には非常に熱心で、その成長をしつかりと見守っていたことが、残された手紙などからうかがわれます。

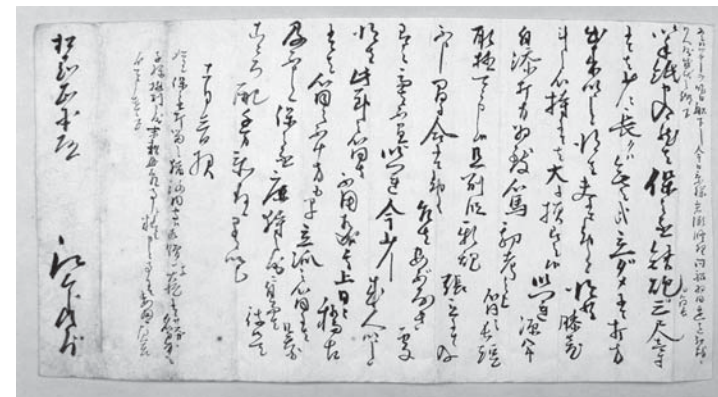
幼くして亡くなった者を除くと、坦庵公には6人の子どもがいました。そのうち、息子の保之丞(後の第37代江川家当主英敏)について書かれた手紙を紹介しましょう。これは、江戸にあった坦庵公が、葦山代官所の元々手代松岡正平(※)に宛てた手紙です。主な内容は、息子保之丞が稽古に使っている鉄砲の銃身の長さについてです。「立った姿勢で射撃ができるような長さにするように」など細かく指示をしており、西洋砲術の修行に励む息子を気にかけていたことがわかります。

おもしろいのは、日付のあとに細かい字で書かれた追伸の部分です。そこには「保之丞が猶で仕留めたイノシシを、上司である勘定奉行松平近直に贈ったところ非常に喜ばれた」とあります。また、「近直から『さすがは名家の子孫、末頼もしいことだ』と賛辞を呈された」とも記されています。わざわざ手紙に書いているところからも、息子を褒められてまんざらでもない、坦庵公の心中が想像されます。

いつの世も、子どもを褒められて嬉しくない親はいません。この手紙からは、常に自らを厳しく律し、部下や管轄地の人々に対しても公平か

つ峻厳な態度で接した、坦庵公の父親としての横顔を垣間見ることができないのではないのでしょうか。

※松岡正平は、坦庵公が最も信頼していた部下のひとりです。さまざまなプロジェクトで、坦庵公の片腕として活躍しました。



松岡正平宛江川英龍書状(公益財団法人江川文庫所蔵)